

空間意識——東西・南北の横縦2軸交差を見る場合、日本に大いに影響を齎した（記紀における天地開闢）宇宙創成に係る中国神話——中国古典を紐解く必要がありますが、やや輻輳する処があり、同じ「もの・こと」の対象に対して、異同・食い違いがあることから、現代人が大方思っている、共通する処に留意しつつ簡潔に記述します。

1. 空間意識の基^{もとい}は、宇宙開闢・宇宙創成神話にある

空間意識の基^{もとい}は陰陽二元から始まりますが、その細部解説は別に譲り原初の処だけに触れます。

その1；老子では、「道は一に始まるも、一にしては生ぜず。故に分かれて陰陽と為り、陰陽和合して万物を生ず。故に曰く、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰気を背負い陽気を胸に抱き、この二つを媒介する^{ちゅうき}沖気によって調和を為している。」の表し方です、「天地の万物・森羅万象」が自然数的に徐々に増加して行くイメージを持ちます。『二』は陰陽二元のことです。

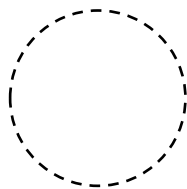
その2；易経では、「易に太極あり、これ両儀を生ず。両儀は四象を生じ、四象は八^{け(か)}卦を生ずる。」の表し方です、徹底した二分法（すなわち、2の累乗で分化発展）になっています。『両儀』は陰陽二元のことです。四象は東西南北の四方を、八^{け(か)}卦はその四方に4隅（東南・東北、西南・西北）を加えた八方のことです。

その3；『淮南子』は、後記図－**1**に表します。

2. 原初認識の空間構造

結局は、陰陽、天地人の基本（初源）構造意識について対比的に整理すると、後記図（表）－**2**のとおりになります。あらゆる「もの・こと（森羅万象、考え方）」は陰陽二元セット、表裏一如であることの理解が大前提です。「全一（太極・太一）」から2・3・4・5・・・への①分化発展と「②帰一還元（私的造語）」は常に一体、すなわち分化発展の観方と帰一還元の観方は、常に自然自発的に往復・往来・交渉するものなのです。したがって、「もの・こと」、同図(表)－2に対して矛盾・同着を感じる、輻輳を感じ蒙昧するというのは、①または②どちらかに拘泥・固執しているからです。逆に、蒙昧から脱却するためには、①と②を線路のように同時並行上で走らせる、いわば考え・想像を同時並行的に巡ることです。

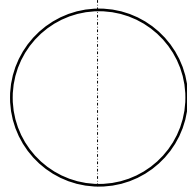
図－１ a



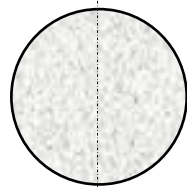
原初の宇宙は、混沌、未
発・未分の世界であった。

図－１ b

[天]

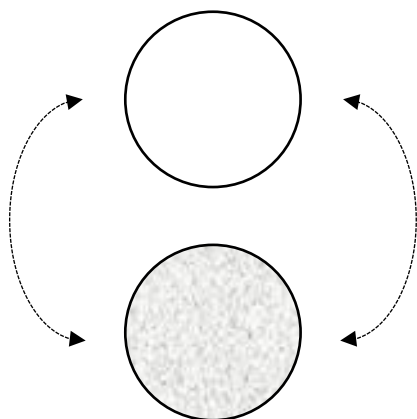


[地]



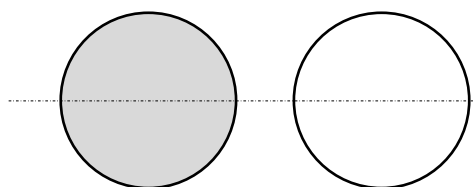
せいよう はくび
清陽なるものは薄靡して
天と為り
じゅうだく ぎょうけつ
重濁なるものは凝竭し
て地と為った。

図－１ c



天地の間にうごめ
きが生じた。

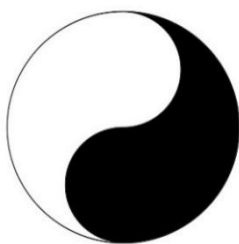
図－１ d



[陰]

[陽]

しゅうせい
その天地の襲精
が陰陽に為った。



総称して陰陽二元

空 間								
木火土金水の五惑星他諸星								
火は、時に熱に、時に光に、時に炎に、時間に応じて、季節に応じて、燃料に応じて、それらの状態も変幻自在に変化します。	水	火						
	夜	昼						
	太陰 (月)	太陽 (日)						
	(陰陽)							
	[天]	[人]	男 (陽)	水(体液)	真水(陽) 塩水(陰)			
	陽							
	太極・太一・全一							
水は、時にきれいに、時に汚れ、時に熱く、時に冷たく、時に硬くなり、それらの状態も変幻自在に変化します。	陰	女 (陰)			真水(陽) 塩水(陰)			
	[地]							
	(陰陽)							
	海原	陸地						
	潮水	真水						
	木火土金水の五元素							
	時 間							
図 (表) - 2								

このような紐付けは、現代科学ではその客観的な裏付けは難しいのではないか——ただし、量子レベルまで掘り下げるとどうなのか——と思うが、この日本創成以来の神祇信仰や記紀神話が大和民族の精神深層に刻まれて来たことは間違いなく、現代日本人の大方がイメージ出来ると思います。

3. 空間認識

民俗学者の吉野裕子著「隠された神々（河出文庫）」や宗教学者の山折哲雄氏著書「新・四国遍路」（PHP 新書）等を参考に要点を参考にしながら私見で整理して見ます。

その1；日本古来の東西信仰

太陽は東から昇って西へ沈むが、月もそれと同様です。月や太陽だけではなく、地球上で観測される天体はすべて東から西へ移動するのですが、これは地球の自転によって天体がこのように動いて見えるためです。そのような動きは不思議なものとして、東西・水平の軸（東・中・西）を神聖視して来ました。仏教が伝来――主に538年（戊午）説と552年（壬申）の2説――し、東方浄瑠璃浄土信仰（日光・月光をはじめ、無数の菩薩が住むという世界）と、西方極楽浄土信仰（十億万仏土先の西方にあり、阿弥陀如来がいるとされる浄土の世界）が東西・水平軸の神聖視に加わり補強しました。

その2；南北軸信仰

一方、中国は唐の時代（日本の飛鳥後半から奈良、平安の前半に相当）においては、陰陽五行思想の影響下、天中不動の星、北極星を中心とする部分（北斗七星を含めた所）を中宮と称し、特に北極星を神霊化して最高の天神「天帝・太極・太一・太子・天子」と称した。したがって、天帝太一というのは北極星を背負って南を向き政治を行うのが一番良い（安定する）とされて、南北・垂直軸が重要視されていました。その思想が日本に渡来人により導入されました。

その3；融合

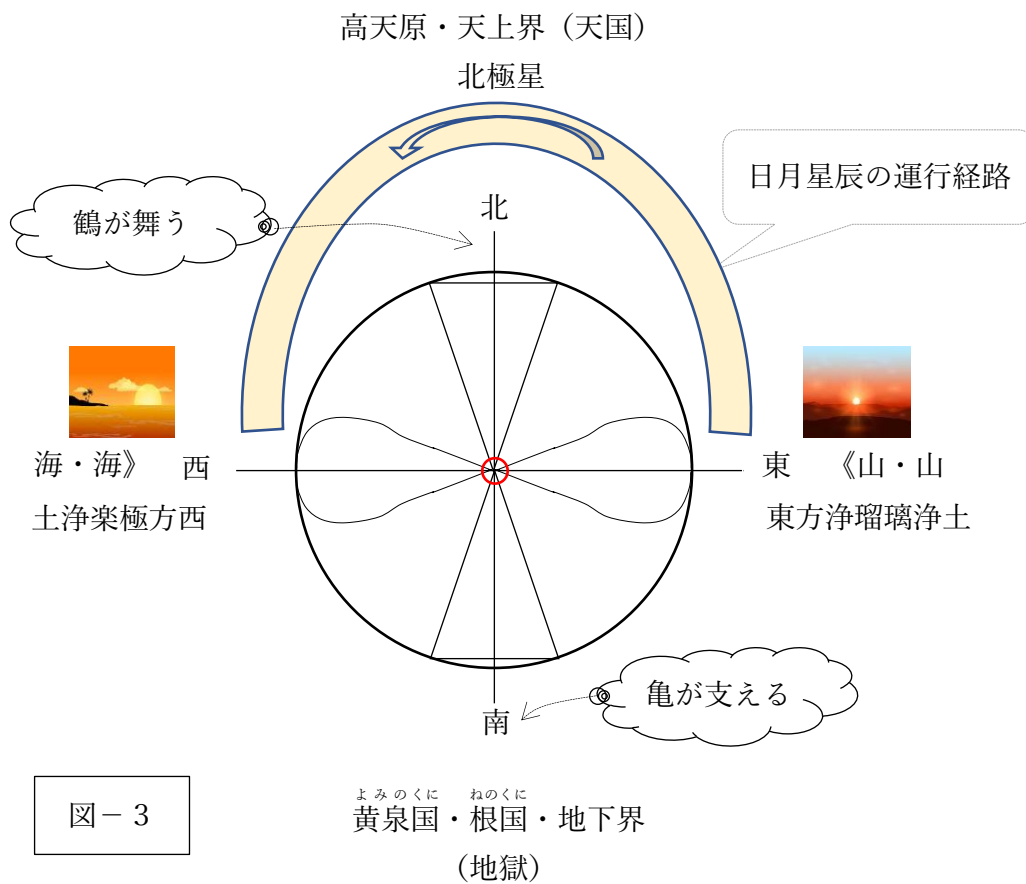
そのような経緯があって、日本の古層にあった東西軸神聖視に中国伝来の南北軸を交差させて意義付けが図られ、統治機構に活かして来たということです。前出「新・四国遍路」には、「・・・日本は農耕社会ですから『太陽』と『月』の恵みを中心に世の中を考え、統治するという仕組みが出来ていた。そのため、東西の軸を大切にした。一方、中国大陸では、天帝（天使）というのは北極星を背負い、よって南を向いて政治をするとして、北極星を中心とした南北の軸に基づく世界観が優勢であった。・・・」

東西軸重視を概念図化すると図-3のとおり、南北軸重視を概念図化すると図-4のとおりになります。

4. 東西南北に係る事例

それらの影響について、前出「新・四国遍路」に、神仏領域に限って今に残る事例が記載されています。なお、“南向き”ということは、祭神本体は北を背にしているからです。

- ・ 奈良時代に建てられた興福寺（藤原氏の氏寺）と春日大社（藤原氏の氏神）は、南面しています。その春日大社は奈良で一番古い神社の一つであり、そこには社殿が五つあり、一殿から四殿までは藤原氏の氏神で南を向いているが、若宮社の五殿だけは西を向いている。若宮社は春日の地主神でありより古いのです。
- ・ また、鳥取県の出雲大社は、「国譲り」に際し、高天原の神々（天照大御神又は高御産巢立日神）のみことのり詔によって創建された宮であるということから南を向いているが、本殿内部の神座は西を向いています。
- ・ 伊勢神宮外宮・内宮ともに南面しているが、内宮御垣内西北隅に鎮座されている興玉神おきたまのかみは西を向いている。やはり、本地大宮所の地主神です。



「円の中心部・直交座標の中心交差点」
あしはらのなかつくに
葦原中国（地上界・国土／須弥山）
しゅみせん

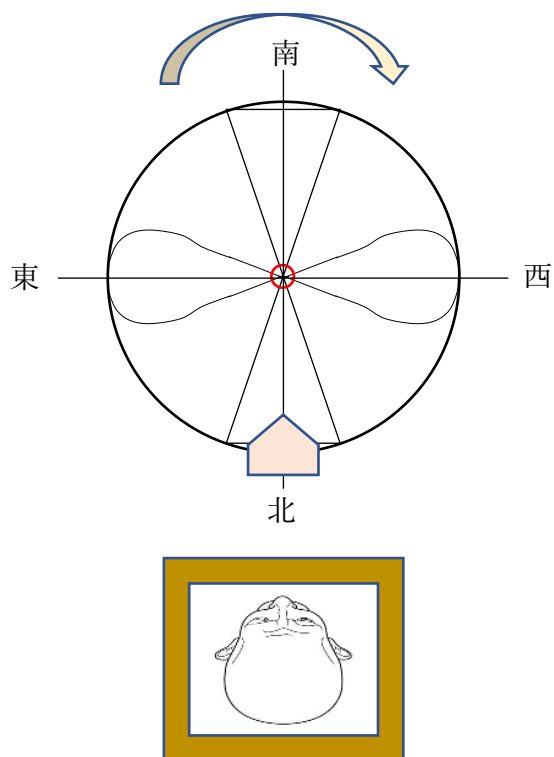


図-4

(end)